

「ジャポニスム2018」続報 6

本号では「縄文」展オープン前後に開催された「ジャポニスム2018」の諸事業、「安藤忠雄」展と諸公演、地方の魅力紹介事業等について報告致します。

1

目次

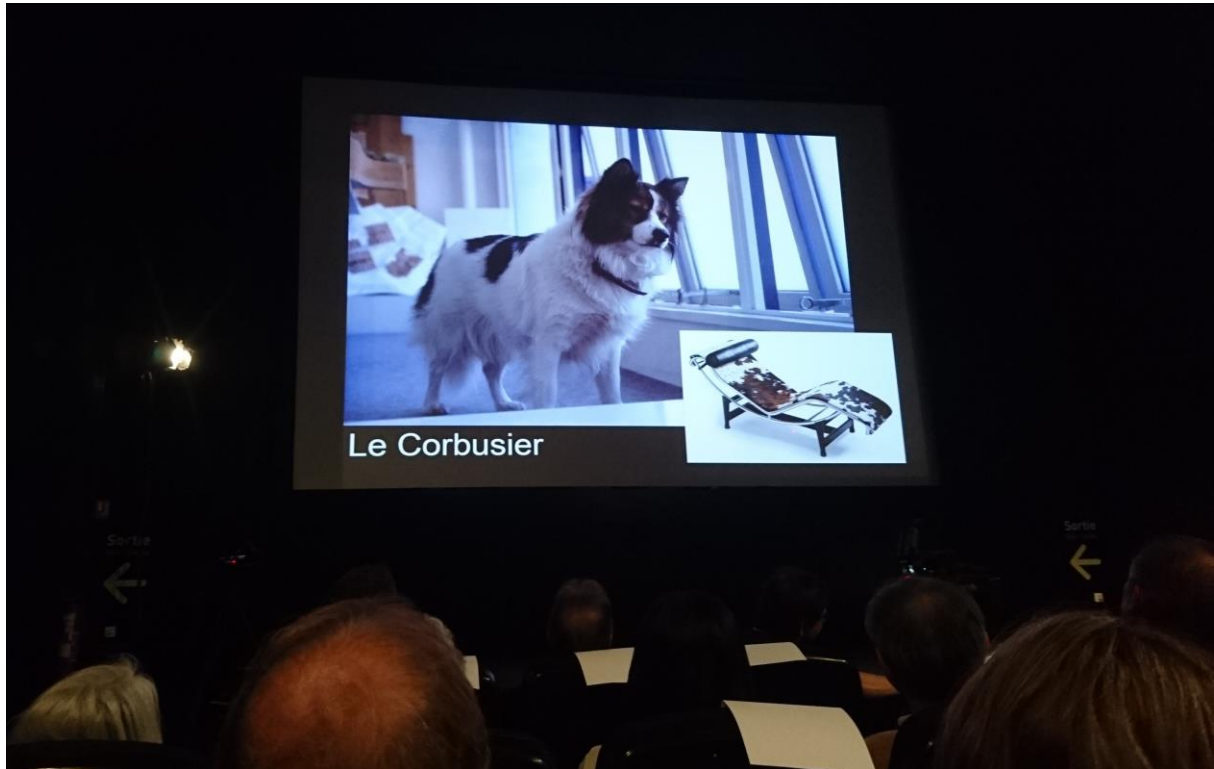
1. 「安藤忠雄」展	2~3
2. 文楽公演	4
3. 雅楽公演	5
4. 日本舞踊公演	6
5. 岡田利規演出「三月の5日間」リクリエーション公演	7
6. 地方の魅力—祭りと文化	8~14

① 「安藤忠雄」展

10月8日(月)に「ジャポニスム2018」の一環としてポンピドゥーセンターで「安藤忠雄—挑戦」展(10月10日~12月31日)のオープニング関連の諸行事が行われました。まず午後3時から建築家・安藤忠雄氏による講演会があり、その後サイン会、そして午後6時からの内覧会、午後8時からの夕食会へと続きました。

講演会冒頭、安藤さんは、「若さは年齢の問題ではない。心の持ちよう、想像力の質、情熱の激しさ、安逸さより挑戦を選ぶ勇気への気質の問題である」というサミュエル・ウルマンの言葉に触発されて建築家としての道を歩んできたことを吐露しました。

また、事務所を立ち上げた頃、子犬が紛れこんで来たので、飼い始めたが、先輩の大建築家・丹下健三さんにちなんで「健三」と名付けようとしたのだそうです。が、周囲の反対があり、もう一人の尊敬する外国の建築家の名前をとって「ル・コルビュジェ」としたのだそうです。どちらの建築家も懂っていたので、いつも身近にいて可愛がるのだからいいだろうと思った、と言って、会場を笑わせました。ウルマンの言葉通り、建築家として人のやらないことに挑戦することを心掛けてきたことを強調し、また、その挑戦を受け入れてくれ、直島の美術館を立ち上げた福武財団の福武総一郎理事長にも感謝していました。



安藤さんの愛犬「ル・コルビュジェ」

展覧会は六甲斜面の「集合住宅」や直島の「美術館」、大阪の「光の教会」、ヴェニス「ブ
ンタ・テッラ・ドガーナ（税関岬）美術館」、そして現在工事中のパリの旧商品取引所のド
ームの改修後の模型など、長いキャリアのこれまでの作品が網羅的に展示されており、大変見
ごたえのあるものです。フランスでは建築は「第1芸術」といわれるほど昔から重要視され、
建築に対する関心も高いことから、内覧会でさえ長蛇の列をつくるほどで、一般公開後も大
盛況が続いています。オープニング当初数日間は一泊2,500人の入場者があったそうで、
安藤さんの人気度をいまさらながら実感しました。



旧商品取引所の外観



旧商品取引所の改修後の模型

内覧会のあと、少人数を招いたポンピドゥーセンターのラ・ヴィーニュ総裁主宰の夕食会
がありましたが、そこには安藤忠雄さんのほか、ポンピドゥーセンターを設計したレンゾ・
ピアノさんや、アラブ世界研究所を設計したジャン・ヌーヴェルさん、シャルル・ド・ゴー
ル国際空港ターミナルビルを設計したポール・アンドゥルーさんら6人の著名な建築家が出
席していました。これだけの建築家が一堂に会することはめったにないことだと夕食会に出
席していた池田亮二さんも感激していました。

なお、この日元気に参加していたパリ日本文化
会館の運営委員でもあるポール・アンドゥルーさん
がその3日後に他界されました。

この場を借りて心からお悔やみ申し上げます。

大建築家6人が並んだ貴重な瞬間
(右からジャン・ヌーヴェル氏、
ポール・アンドゥルー氏、
レンゾ・ピアノ氏、
安藤忠雄氏、
クリスチャン・ド・ボルザンパルク氏、
ドミニク・ペロー氏)



② 文楽公演

10月12日(金)と13日(土)の20時半よりラ・ヴィレットに隣接するシテ・ド・ラ・ミュージックで人形浄瑠璃文楽公演が実施されました。

演目は「日高川入相花王(ひだかがわいりあいぎくら)」と「壺坂観音霊験記」の2つでした。前者は和歌山県にある道成寺の伝説に、朱雀天皇の弟桜木親王と藤原忠文の皇位継承争いに藤原純友の乱を絡ませた内容です。忠文側に追われた桜木親王は山伏の身なりとなり、安珍と名乗って地方の名士の館に立ち寄りますが、その名士の娘清姫に恋慕されます。安珍には別の恋人がいたので、道成寺を目ざして逃れますが、嫉妬に狂った清姫が後を追ひ、蛇となって日高川を渡ります。見せ場はその蛇に変身する場面です。会場は、文楽の舞台としては広すぎる感が否めませんでした。それでも蛇が川を渡る場面などでは人形使いが動きに工夫を凝らしているように思われました。

後者のあらすじは、盲目の沢市が、夜ごと出かける妻のお里に疑いをもちますが、実は彼の目の快復を祈るために壺坂寺に日参していたと分かります。彼はお里に詫び、夫婦そろって寺に参詣したものの、目は治らないだろうと絶望し、お里を先に家に帰して、谷に身を投げてしまいます。胸騒ぎがして寺に引き返してそれを知ったお里も夫の後を追ひます。そこへ観音が現れ、「兩人とも今日までの命だが、妻の貞心ならびに日頃の功德に免じて寿命を延ばす。これからはますます敬虔な信心をもって、三十三所を巡礼し、仏恩に感謝するように」と告げます。夫婦は生き返り、沢市の目も明るくという文楽には珍しいハッピーエンドとなっています。近世の浄瑠璃にはこのような生き返りの結末は稀なため、明治期に作られたこの新作浄瑠璃は江戸期のものも含めたすべての演目の中でも、最も上演頻度が高いものの一つとされています。

熱演する義太夫の声、心情の動きを表す三味線の緩急の音色、見事な人形使いが三位一体となった上演に、観客たちは皆心を打たれ、立ち上がって拍手喝采しました。



文楽「日高川入相花王」の一場面 ©Yasuhiro Yokota Photo: The Japan Foundation

③ 雅楽公演

10月13日(土)20時半からフィルハーモニー・ド・パリで雅楽演奏グループ伶楽舎とダンサー森山開次のコラボによる現代雅楽作品が上演されました。

9月3日に上演された宮内庁式部職楽部による古式豊かな伝統的な雅楽公演と異なり、平安貴族の雅な衣裳をまとった演者たちが、芝祐靖・音楽監督の伝統にとらわれない演出による伝統的な雅楽曲に続いて、現代作曲家の権代敦彦(ごんたい あつひこ)氏の曲「彼岸の時間」を演奏したり、猿谷紀郎(さるや としろう)氏のオリジナル曲「綸綬(りんじゅ)」に合わせて世界的なダンサーである森山開次らが踊ったりするなど、新たな趣向の独特の味わいを醸し出しました。

たゆたうような雅楽の楽曲の音色は、まさに心拍のリズムや波や風の音、雨音などにもみられる1/fの揺らぎの音を聴いているような、とても気持ちの良い音楽で、演奏中、別空間や異次元の世界に誘われるような心地良い感覚に浸ることができました。



伶楽舎と森山開次による雅楽公演の一場面 ©Yasuhiro Yokota Photo: The Japan Foundation

太鼓公演

翌14日に「鼓動」の創設に関わり、世界初の太鼓独奏者として名高い林英哲氏と同氏の薫陶を受けた鼓手からなる太鼓ユニットの「英哲風雲の会」による、伝統と革新を織り交ぜた太鼓の演奏会がフィルハーモニー・ド・パリで開催されましたが、筆者は時間の調整がつかず、残念ながら聴くことはできませんでした。

④ 日本舞踊公演

10月14日(日)と15日(月)の20時半からシテ・ド・ラ・ミュージックで人間国宝の舞踊家・井上八千代さんと、同じく人間国宝の琴、三味線の演奏家・富山清琴さんによる日本舞踊の公演が行われました。

筆者が見た15日の公演は、伝統的な日本舞踊の演目である藤の花の精が躍る幻想的な「藤娘」、日本舞踊の伝統を踏まえつつ独創的でシンプルで大胆な二人の人間国宝の共演する「八島」、非常に動きの激しいダイナミックな演目である「連獅子」が上演されました。

公演後、シテ・ド・ラ・ミュージック=フィルハーモニー・ド・パリのローラン・ベイル総裁による井上八千代さんと富山清琴さんへのフランス芸術文化シュバリエ勲章の叙勲式が行われ、その後、日産の特別協賛によるレセプションが開かれました。そこには日本舞踊協会の会長をしている元文化庁長官の近藤誠一さんも参加されました。



「連獅子」の一場面 ©KOS-CREA Photo: The Japan Foundation



叙勲式後の記念撮影(左から井上八千代さん、ベイル総裁、富山清琴さん)

©KOS-CREA Photo: The Japan Foundation

⑤ 岡田利規演出「三月の5日間」リクリエーション公演

10月17日(水)から20日(土)まで日本現代演劇の旗手・岡田利規(チェルフィッチュ主宰)演出による「三月の5日間」のリクリエーション(再創作)が「ジャポニスム2018」および「フェスティバル・ドートンヌ・パリ」の一環としてポンピドゥーセンターで開催されました。2003年初演の劇ですが、15年後の今回は役者を入れ替えたリメイク公演になります。

筆者は二日目の18日(木)20時半からの公演を見ましたが、自由席であったこともあり、最前列で見ることができました。

この劇は米国によるイラク空爆が始まった2003年3月の5日間が舞台で、若者たちの語りだけで成り立っています。何の目標も持てない生活を送っている東京の若者たちの、日常的な身振りを誇張して関節のないクラゲのようにしてみせた身体と、川上未映子の文章のような切れ目の無い語りのリレーを通じて、恋人同士でもない行きずりの、愛のないカップルに起こった数日前のできごとを中心とした若者たちの様々なエピソードを、役者がときに噂話を話すように第三者となって、時に当事者となって、主体と客体が次々と変化していきつつ、ところどころ重複する形で振り返りながら、浮き彫りにしていきます。ナレーションと身体の動きを徹底的に脱構築してみせて世界の演劇界に衝撃を与えた岡田氏の代表作は、最後にそのカップルが伝統的な演劇の登場人物のように登場し、ホテル代の貸し借りを清算した上で、お互いにその日の行きずりの愛の行為をなかつたことにしようと約束して別れるシーンで終わります。

戦争という非日常と愛の行為という日常を対比させながら、人間にとって何が重要なのかを問いかけているように思えました。



「三月の5日間」の一場面 ©KOS-CREA Photo: The Japan Foundation

⑥ 地方の魅力ー祭りと文化

10月17日(水)から10月27日(土)まで、「地方の魅力ー祭りと文化」というフェスティバルがパリ日本文化会館とアクリマタシオン庭園で開催されました。

17日の「淡路人形浄瑠璃」から始まって、千葉県市川市の神輿の組み立て・解体のデモンストレーションや徳島の阿波の藍染めや阿波踊り、岩手の民族舞踊のアトリエ、山梨の信玄公祭り、岩手のさんさ踊り、青森県五所川原の立佞武多祭り、奈良県春日大社の春日若宮おん祭り行列に加えて関連の講演と公演、高知のよさこい踊り、切り絵や紙漉きのアトリエ、木曾の唄と踊り、新潟の鯛車づくりのアトリエ、凧の製作アトリエ、市山流日本舞踊公演、岐阜県の地歌舞伎公演、ペンによるマンガ素描アトリエなど、日本の12の地方自治体と連携し、各地伝来の7つの祭り・踊りと15の民族芸能公演や生活文化企画を11日間にわたって集中的に紹介しました。日本の地方文化の粋が外国でこれだけ短期間に一挙に紹介されたのは初めてのことでないかと思えます。

フランス人や在仏外国人はもちろん、在仏日本人もお子様連れで大勢パリ日本文化会館やアクリマタシオン庭園の祭り会場を訪れました。特に本格的な祭りが開催されたアクリマタシオン庭園には週末の3日間で6万人が訪れたということです。



パリ日本文化会館地上階に飾られた岩手県や鳥取県のパネルと岩手県の関係者

この機会に、奈良県荒井正吾知事一行、岩手県達増(たっそ)拓也知事一行、岐阜県古田肇知事一行など、多くの地方自治体の首長を含むミッション団がパリ日本文化会館を訪れました。



青森県の高さ 10mを超える立佞武多 (左の 2 写真: 前と後ろ)

市川市行徳の神輿 (右)

(10月20日アクリマタシオン庭園にて)



鏡割りの場所に集まった徳島の阿波おどりの参加者たち (10月20日アクリマタシオン庭園にて)

(後ろに見えるのは田根剛設計・風呂敷の巨大テントー生地は KENZO デザイン)



山梨県の信玄公祭りの催しを見るために庭園を埋め尽くした観客（10月20日アクリマタシオン庭園にて）



山梨県の信玄公祭りの行列（10月20日アクリマタシオン庭園にて）



屋台村の道を埋め尽くす人々（10月20日アクリマタシオン庭園にて）



岩手県のさんさ踊りを披露するミスさんさ踊り（10月20日アクリマタシオン庭園にて）



奈良県の春日若宮おん祭りの行列（10月22日アクリマタシオン庭園にて）



歓迎レセプションで杯を交わす右から安藤・国際交流基金理事長、木寺・駐仏日本大使、ドゥッセーニュ＝バリエール・バリエール・グループ最高組織変革責任者、達増・岩手県知事、守本・南あわじ市長
（10月20日シャンゼリゼ大通りフーケにて）



徳島県の阿波踊り（10月20日にシャンゼリゼ大通りフーケで行われた歓迎レセプションにて）



高知県のよさこい踊り（10月20日にシャンゼリゼ大通りフーケで行われた歓迎レセプションにて）



奈良県春日大社の春日若宮おん祭りの講演会に続く公演会（10月23日パリ日本文化会館にて）



岐阜県地歌舞伎一座の終演後挨拶（10月27日パリ日本文化会館にて）

以上

注記: 本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一の見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。